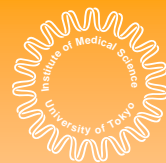


医科研病院だより



第25号

発行：東京大学医科学研究所附属病院
平成26年10月15日
〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1
代表電話03-3443-8111
ホームページ <http://www.transrec.jp/>

CONTENTS

医療安全・感染制御センターの発足……………	1
すこやか・カフェ……………	2
栄養サブリ……………	3
なんでも・ひろば……………	4

医療安全・感染制御センターの発足

副病院長 東條 有伸

医科研病院の業務に携わる教職員全員を対象として、毎年定期的に「医療安全・院内感染対策合同講習会」が開催されています。今年は6月下旬に第1回の講習会を開催しましたが、その冒頭で、これまで独立した組織であった医療安全管理部とICT（感染制御チーム）を統合して「医療安全・感染制御センター」が発足の旨アナウンスしました。医療安全と感染制御、特に院内感染対策は、病院を受診する患者さんに安心・安全な医療を提供するうえで不可欠な車の両輪といえます。国立大学病院には医療安全と院内感染対策を扱う委員会がいち早く設置され、実務を担当する部署が活動していましたが、平成11年、某大学病院において手術患者取り違えという重大な医療事故が起きました。さらに同年、医療施設におけるバンコマイシン耐性腸球菌（VRE）感染や結核菌感染症例の報告が相次ぎ、同一施設内での院内感染の同時多発例や死亡事例も発生しました。これらのイベントが契機となり、病院の危機管理をより実行性のあるものとするため、全国国立大学附属病院長会議の肝煎りで国立大学附属病院安全対策協議会と感染対策協議会が設立され、病院間の連携協力体制が構築された経緯があります。前述の講習会への出席義務はこのような流れで生じたのですが、それだけ安全管理と感染制御は病院診療において重責を担っているわけです。

当センターは副病院長の東條がセンター長として統括し、医療安全管理部は細野治部長（アレルギー・免疫科）、柄澤真紀子部員（TR・治験センター）と成田初子看護師長、感染制御部は鯉渕智彦部長（感染免疫内科）と小粥美香（〆）

(〆)看護師長がそれぞれ配置された構成となっています。そして、医療安全管理部は各部署のリスクマネージャーと連携をとりつつ医療安全を推進し、感染制御部は従来のICTを率いて院内感染対策にあたっています。また、どちらも定期的に病院内をラウンドして問題点を指摘し、改善を促しています。大学医学部附属病院の1割程度の規模（患者数、教職員数）しかない医科研病院でも委員会の数は同じですので、多くのスタッフが複数の委員会や業務を兼任している実情は当センターのスタッフも同様です。少人数で病院の危機管理を遂行するには、病院スタッフ全員の理解と協力が不可欠ですので、どうぞよろしく願いいたします。

最後に一言付け加えますが、センター発足に伴い毎月ニュースレターを発行することにしました。創刊（9月）号は既に病院各所に掲示してあります。極めて簡潔な内容ですので、是非目を通していただけますでしょうか。



すこやか・カフェ



～デング熱について～

感染免疫内科 鯉淵 智彦

2014年8月26日に、70年ぶりに国内でのデング熱感染者が確認され話題となりました。8月29日には当科でも国内感染の患者さんを1名診断しました。この疾患についてご説明します。

<デング熱とは>

デング熱は、デング熱ウイルスの感染によって生じる疾患で蚊によって媒介されます。人から人への感染はありません。潜伏期は3日～7日程度で、主な症状は発熱、関節痛、頭痛や発疹です。デング熱に特徴的な症状はありません。デング熱ウイルスを抑制する薬剤（特異的な治療法）はなく、ワクチンも開発されていません。しかし重症化して致命的な状態になることは稀です。発熱が続く場合にはアセトアミノフェンなどの解熱剤を使ったり、脱水がひどい場合には点滴を行ったりするなどの対症療法だけでほとんどの方が治癒します。解熱剤の一部には症状を増悪させるものがあるため自己判断での内服はおやめ下さい。ウイルスに感染しても症状が出ない方（不顕性感染といいます）は50%以上とされています。当科では毎年10例程度のデング熱患者さんを診察しています。今回の事例を除き、全て海外で感染された方です。8月29日に、他院から紹介された患者さんを国内感染のデング熱と診断しました。この方は8月中旬に代々木公園で蚊に刺され、その後発熱と皮疹が見られました。入院はせず対症療法のみで治癒しています。我々の経験からすると、入院が必要となる方は一部であり、自宅療養で回復する方が大部分です。ただし頻度は高くはないですが、鼻出血や消化管出血などの出血症状を起こして重症化することがあるので（デング出血熱と呼びます）、経過観察のため入院が好ましい場合もあります。もしデング熱と診断された場合には、医師の指示に従って下さい。

世界の発生地域は図1にあるように南アジア～東南(ノ)



図1. デング熱、デング出血熱の発生地域

(ノ) アジア、アフリカの一部および中南米です。国立感染症研究所によると1999年から2010年までに国内で報告されたデング熱患者は合計873例（全て海外での感染者）で、そのうちデング出血熱は36例（4.1%）、死亡した方は1名（0.1%）でした。参考までに、毎年冬に流行する季節性インフルエンザの死亡率は0.1%程度です。

<媒介する蚊について>

デング熱ウイルスを媒介するのは、ネッタイシマカとヒトスジシマカです。日本にはネッタイシマカはいませんので、今回の発生に関係しているのは「ヒトスジシマカ」と考えられます。図2にあるようにヒトスジシマカの分布域北限は1950年頃までは関東地方でしたが、徐々に北上しています。温暖化の影響が考えられます。ヒトスジシマカの主な活動時間は日中です。なお、主に夜間に行動するアカイエカ（ブーンと音を立てて飛んでくる）は、デング熱ウイルスは媒介しません。

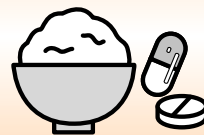


図2. ヒトスジシマカの分布域の変化（国立感染症研究所の資料による）

<今回の発生原因と今後の展望>

今回の国内発生の明確なルートは判明していません。海外で感染した人が日本に来てヒトスジシマカに刺され、その蚊を媒介して渡航歴のない日本人に感染した可能性があります。ヒトスジシマカの活動時期は5月から10月下旬ですので、デング熱が年間を通して発生することはありません。今回、70年ぶりに海外渡航歴のない方から報告されたため注目されましたが、重症化する頻度は低い疾患ですので冷静に対応して頂きたいと思います。

栄養サプリ

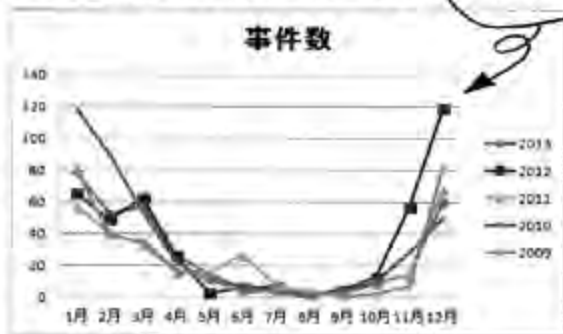


食中毒は夏だけではありません・・・

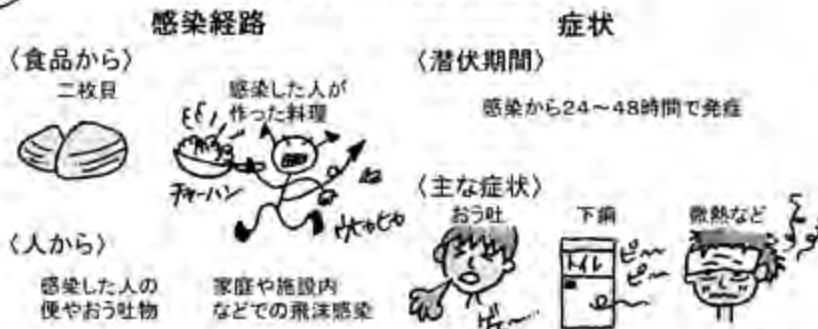
栄養管理室

冬に多発！ノロウイルスによる食中毒ご用心！！

■食中毒の発生状況(11月～2月の冬期に多い)



■ノロウイルスの感染経路と症状



(厚生労働省ホームページより引用改編)

家庭で出来ます！ノロウイルスによる食中毒予防のポイント

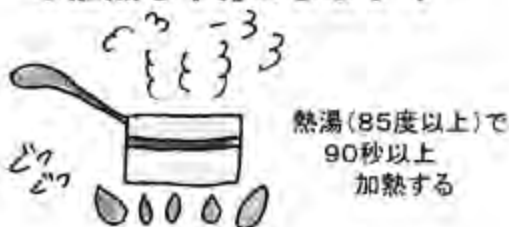
○手洗いを徹底しましょう



○調理器具はしっかり清潔に



○加熱を十分しましょう



○症状がある場合は料理しない



■食中毒かも・・・そんな時は？

まずは医療機関にかかりましょう！



入手可能であれば・・・

薬局などで市販されています



「OS-1」がおすすめですよ

嘔吐や下痢による脱水に気をつけましょう

家庭で作れる“経口補水液”



なんでも・ひろば



港区立中学校への講師派遣

当院は、毎月市民公開医療懇談会を開催したり、港区と連携協定を締結したりと地元と密着した病院を目指しています。港区との連携協定では、港区立中学校への講師派遣、すなわち「出前授業」の実施も含まれています。これは、当院の医師を含めた職員がどのような内容で講義ができるかを登録し、また、各中学校からの実施して欲しい授業内容の希望とをマッチングさせて港区から講師派遣の要請がなされるものです。

平成25年度から始まりましたが、2回ほど産経新聞に取り上げていただきました。1回目は10月17日に「iPS細胞に中学生興味 港区東大医科研准教授が出前授業」の見出しで掲載されました。小児科長で、医科研の幹細胞治療研究センターで再生医療や遺伝子治療の研究に従事している大津真准教授が御成門中学校でiPS細胞について行った講義のもようが書かれています。質疑応答ではiPS細胞の可能性について（身長を伸ばしたり、頭を良くしたり等）生徒から歓声が上がっていたことや、看護教諭の方の感想が書かれており、好評だったようです。「興味をもち、もっと勉強したいと思った」という感想もありますので、未来の科学者誕生の動機になったかもしれません。また、12月12日には、「東大医科研病院の薬剤部長 正しい服薬法を伝授」の見出しで朝日中学校において黒川薬剤部長が「くすりと健康について」授業を行ったことが掲載されました(ノ)

(ノ)た。薬の作用と副作用の関係と使い方の難しさ、そしてコンビニエンスストアやインターネットで薬の購入が可能になってきていますがその問題点について説明があったそうです。出席した中学生からの「初めて聞くことが多く、分かりやすかった。服薬中の父に伝えたい」という感想も掲載されており、今回も好評だったようです。区によると、平成24年度に医薬品教育が義務化されてから、薬剤師が出前授業を行うのは23区で初めてだったそうです。このように報道されることは我々の励みになりますし、これからの授業に中学生からも関心をより持ってもらうことに繋がるかと思えます。

今年度も、職員が話のできる事について調査が始まっています。身近な病気、難病、そして最先端研究とさまざまな話題について授業の機会を提供できるのではないかと考えています。今年も中学生の興味と我々の提供できる内容が一致し、より多くの中学生の役に立てればと一同願っているところです。
(広報委員 F.N.)

◆病院からのお知らせ◆

●臨床検体の取扱いにつきまして

当院での保存・追加採取検体を用いた臨床研究名をお知りになりたい方は

http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/ore/IMSUT_ORE_7.html
をご覧ください。

東京大学医科学研究所附属病院・ご利用案内

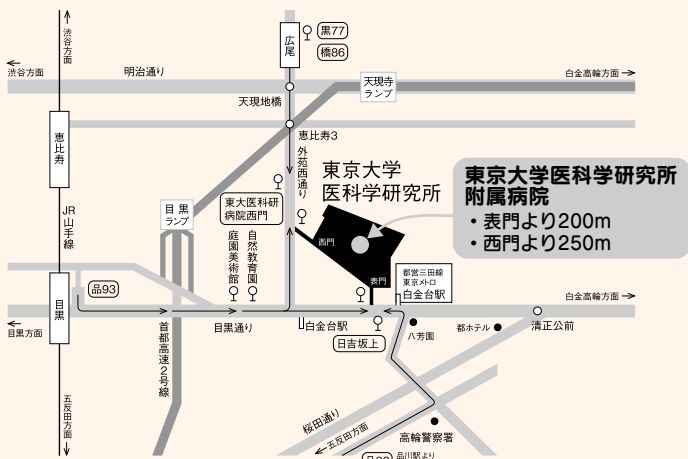
診療科

内科（総合、血液腫瘍、感染症、アレルギー・免疫、代謝・内分泌、循環器、消化器）

小児科（小児細胞移植）

外科（一般、腫瘍、消化器、乳腺）、整形外科（関節）

脳腫瘍外科、放射線科、麻酔科、遺伝相談



外来診療日

月曜日～金曜日（祝日および年末年始を除く）

診療受付時間

8：30～11：30（初診・再診）

12：30～16：00（再診のみ）

※予約時間の15分前までに受付にお越しください。

（確実にご受診いただくために、ぜひ予約をお取りください）

予約専用電話（予約受付および変更）

診察：03-5449-5560

検査：03-5449-5355

受付時間 8：30～17：00（外来診療日のみ）

アクセス

- 東京メトロ南北線・都営地下鉄三田線で「白金台駅」下車
 - JR山手線目黒駅東口から都バス品93大井町競馬場行で「白金台駅」下車、あるいは都バス黒77千駄ヶ谷行か橋86新橋駅行で「東大医科研西門」下車、または駅より歩いて約15分、タクシーで約5分（1メートル）
 - JR品川駅から都バス品93目黒駅行で「白金台駅」下車
 - 東京メトロ日比谷線広尾駅から都バス広尾橋から黒77または橋86目黒駅行で「東大医科研病院西門」下車
- ※患者専用駐車スペースも数台分ございます。ご利用は受付にお申し出ください。